

## 宜野湾市長選敗北から考えていること

山本英夫

先日、宜野湾市長選の結果は、本紙読者ならば、ご存知だろう。この件について、私が考えていることを書き留める。この選挙は、現職の安里猛市長が病氣療養を理由に、昨年末に、辞職を表明。これに、待つてましたとばかりに立候補したのが、自民党の佐喜眞淳候補。これに対抗して、一月九日、伊波洋一候補が、革新統一で、返り咲きを狙った。

佐喜眞候補は、県議であり、この六月の選挙の準備に入っていた。出遅れたのは伊波候補だった。そのうえ、返り咲き（一〇年秋の県知事選で辞職）でもあり、不利だった。しかし、選挙戦も始まったばかりの沖繩タイムスは、「伊波、先行」（二月五日）とし、現に伊波有利のムードもあがっていく。しかし結果は九〇〇票差の敗北。

この九〇〇票差は数字ほど小差ではない。伊波・安里は（革新市政が二七年続いた）、基地撤去にむけた訴えを繰り返して、街づくりなどでも実績をあげてきた。また、二月初め、国会で、沖繩防衛局（防衛省）の組織ぐるみの選挙介入が暴露された。これで伊波が一挙に有利になったはずだ。

野田政権は、この選挙介入（自衛隊員・職員、家族・親戚への選挙講話。真部沖繩防衛局長は、誰に入れるとは名言していないと、釈明。しかし、勤務時間内に多数を集めた選挙講話。暗に、誰となるのは明きらかだ）をした局長を更迭すらしなかった。選挙前に更迭したら、却って選挙にマイナスと読んだのだろうか。居直りきつたのだ。そして二月四日に沖繩タイムスが報じた、「米政府、辺野古案断念！」は、大きな反響を呼んだ（特にグラム移転と辺野古移設パッケージ論を破棄と）。しかし日本政府は、これを持っていたかのように、日米の審議官級会談を繰り返し、二〇〇五年の「米軍再編」（二〇一〇年五月の辺野古移設の再確認）の破産を取り繕い、嘉手納以南の先行返還論などを垂れ流した。

こうした「混乱」が、佐喜眞に有利に働いたようだ。どちらがなっても、普天間返還は難しいと。ならば、若く、「チェンジ」を叫ぶ彼が良いと。私は、この「チェンジ」が決定的な意味をもったのではないかと読んでいた。彼の「チェンジ」を私も直接聴いたが、中身が曖昧で、魅力的とは思えない。単なるイメージ戦略だ。ここで二つの問題がある。伊波は基地交付金等の国のお墨付きを基本的に断り、自主財源を削り出してきた。他方の佐喜眞は、基地交付金をいただきながら、

民の生活財源にすると。この決定的な対立点を伊波陣営は、批判したが、十分に有権者に届けられなかった。彼は、基地の中を借用している市役所前の駐車場、野球場の返還なども、要求すべきだったろう。市民が使い、米軍が使っていない場所は、返還して当然だからだ。また、基地がらみ財政がもたらす非を具体的に暴露すべきだった。

もう一点。市民の中に激のように潜んでいる、「右旋回待望」ムードを軽視したことだ。沖繩といえども、街中の本屋は「日本」の本屋に並ぶような「右翼本」をどんひやら並べている。幸福の科学は選挙の度に公然と活動しているし、沖繩各所に立派な会館を建てている。大江・岩波裁判の策動（判決は否としたが）や八重山の右派教科書の採択（竹富町は拒否。別を採択）など、あの沖繩の歴史をつぶそうとする策動は、続いている。さらに沖繩防衛協会の活動は、軽視できない。与那国島に自衛隊駐屯地をつくらうとする動きは、この防衛協会が音頭をとっている。彼らは、土建業者もだが、自衛隊員・家族がメンバーであり、OB・OGとその家族も含めれば、侮れない数だ。

因みに、佐喜眞は、「日本会議」のメンバーだとウエブにも自ら書き込んでいる男だ。この選挙結果を聞いた改憲派は、大喜びしたことだろう（クソ!!）。こう書くとお前は何をしていると、言われよう。まずは、東京で写真展を開催する。

山本英夫写真展「沖繩 基地の重圧をゆるがず」

日時 五月五日〜三日 一時〜一九時（最終日一七時）

会場 パオギャラリー（東京 東中野）

問い合わせ

03 (5009) 0779 / メール: photoyamamoto@gmail.plata.jp

二〇一二は沖繩が「日本復帰40年」。だからこそ、歴史を振り返り、今、この時の基地の現状を明らかにしたい。そして基地の重圧をゆるがせようと努力されている人々の姿を写真したい。沖繩にかかわり続け、沖繩差別と安保体制と向き合う・闘う写真をどうかご覧ください。これは私達の問題だと考えるきっかけになればと思います。

（やまもと・ひでお／フォトグラファー）